

# 『六阿彌陀縁起』について ——解説並びに翻刻——

稲垣 泰 一

## 〔解説〕

### 一

架蔵の『六阿彌陀縁起』（版本）一冊について、簡単な解説とともに、翻刻文を付して紹介することとする。

まず、書誌を記しておく。

明治時代初期の版本一冊。料紙は楮紙。縦二十二・八糎。横十五・八糎。表紙・裏表紙とも本文共紙。袋綴。仮綴。全七丁（表紙・裏表紙を含む）。本文は每半葉八行。表紙中央に「六阿彌陀縁起」と外題（版）があり、その四周を单边枠で囲む。内題は「武蔵國六阿彌陀縁起」（一才冒頭）。表紙ウ以下、裏表紙オまで、各丁オ・ウには四周单边匡郭がある。縦十八糎、横十二・七糎。また、界線七本（八行分の本文枠）が引かれる。界線幅は各一・六糎。各丁に

は、丁付（一〇五）が施されている。最末尾（裏表紙オ）に「明治十三年／九月廿日翻刻」とする奥付がある。したがって、本書は明治十三年（一八八〇）以降の版行である。

本書は江戸時代、近世後期、特に文化文政期（一八〇四～三〇）頃に盛んに行われた六阿彌陀詣に関わる、行基作と伝える六体の阿彌陀仏像彫刻の由来と、それを本尊として安置する六カ寺の寺名由来を記し、六阿彌陀詣の御利益を説く縁起である。同様の冊子として『六阿彌陀略縁起』（文政八年再板、全四丁）がある。これは書名の如く、内容上は本書の略抄本で、表紙ウの六カ寺の寺名を掲げる体裁は同じであるが、本文内容は本書の抄出である。したがって、本書が基づいた元本は文政八年（一八二五）以前に遡ると考えられる。よって、新資料としてここに翻刻・紹介することとした。

次に、本書の内容の梗概を以下に記す。

- ① 昔、聖武天皇の御代の頃、武蔵国足立郡に足立の長者という豪族がいた。何不足なく、暮らしていたが、子供がいなかった。長者はこれを嘆いて紀州熊野大神に祈請して一人の女子を授かり、足立姫と名付けた。長者はこの子を愛育し、この子は美しく教養豊かな娘に成長して評判になった。近隣の長者である豊島の長者がこれを聞いて、嫁に迎え入れた。しかし、姑と折り合いが悪く、足立姫は苦しみの日々を送った。
- ② ある日、姫は親里に帰る途中、姑のいじめに堪えきれず、沼田川に身を投げて自殺した。侍女たち五人もその後を追って入水した。
- ③ 足立の長者は悲嘆のあまり、六人の女たちの菩提をとぶらうため、発心して諸国の霊場を参拝する旅に出た。
- ④ 紀伊国の熊野神社に参籠したところ、熊野大神から一子を授けた理由、今後は仏像を造って衆生を済度すること、霊木を与えることなどの夢告を得る。
- ⑤ 長者は感銘して下山すると、光明かがやく霊木を発見し、熊野の浦から故郷の沼田の浦へ流れ着く

よう願をかける。

- ⑦ 長者は諸州の仏閣を参詣して帰郷したところ、霊木が流れ着いていた。その地を熊野木という。長者は霊木のいわれを村人たちに語った。
- ⑧ 折しも行基菩薩がこの国に巡行して来た。長者は娘のこと、霊木のことを語り、行基に仏像の彫刻を依頼した。行基は六人の女たちの菩提のために、六字の名号になぞらえて、六体の阿弥陀仏像を彫刻した。その地を元木という。
- ⑨ その後、長者は家の周辺の所々に仏堂を建て、六体の阿弥陀仏をそれぞれ安置し、六カ寺とした。その因縁によって、六カ寺の寺名を阿弥陀仏の誓願になぞらえて名付けたのである。
- ⑩ このようなことから、阿弥陀仏の誓願にあずかろうと、古来、春と秋の彼岸の折には、諸人がこれらの寺々を参詣することが絶えないのである。

## 二

六阿弥陀詣は江戸時代末期に盛んに行われた、多くの人々が春と秋の彼岸の折に、行楽を兼ねて六カ所の阿弥陀仏を参詣する行事である。第一番が武蔵国豊島郡豊島

村の西福寺（北区豊島二丁目）、第二番は足立郡小台村の延命寺（明治初期に廃寺となり、恵明寺〈足立区江北二丁目〉に合併）、第三番は豊島郡西ヶ原村の無量寺（北区西ヶ原一丁目）、第四番は同郡田端村の与楽寺（北区田端一丁目）、第五番は同郡下谷の常楽院（台東区上野四丁目、現在は調布市西つつじヶ丘に移転し常楽寺となる）、第六番が葛飾郡亀戸村の常光寺（江東区亀戸四丁目）である。以上六カ寺のほかに、六阿弥陀仏像の霊木の残った余り木で造られた、木余阿弥陀を安置する足立郡宮城村の性翁寺（足立区扇二丁目）がある。これを含めて、七カ寺を参詣するのが通例であった。

六阿弥陀詣については、『江戸砂子』『新編武蔵風土記稿』など、いくつかの地誌類に記されているが、十方庵の『遊歴雜記』第二編が最も詳細で、かつ具体的にその由来を記している。また、『江戸名所図会』は各寺々の所在と簡略な説明を、それぞれの地点で記すとともに、六阿弥陀廻りの人々の姿を描く。『東都歳事記』は、二月、彼岸の項で、順路と行程を記すとともに、六阿弥陀参り全体の景観を俯瞰する図を掲げている。

参詣の順路は、第一番、木余、第二番、第三番、第四番、第五番、第六番の順、またはその逆、あるいは第五番、第四番、第三番、第一番、第二番、木余、第六番の

ルートがあった。巡拝地図も刊行されていた。たとえば、『武州江戸六阿弥陀巡拝之図』（文政十二年秋刊、北区飛鳥山博物館所蔵）は第四番与楽寺蔵版である。

本書は六阿弥陀仏彫刻の由来と、それを安置する寺々の寺名由来を一通り説き明かす縁起で、登場人物については具体性がなく、六阿弥陀詣を勧奨するところに力点がある。このようなところから、本書は六阿弥陀詣の巡拝地図と共に、関連する寺々で、販売されたものと考えられよう。

また、各寺々では、独自に略縁起を刊行して販売していたらしい。ただし、それぞれ登場人物、地名、筋の展開に小異がある。たとえば、娘の親の足立の長者を足立従二位宰相藤原正成（第三番、第六番）、宮城宰相（木余）とし、豊島の長者を（豊島左衛門尉）（平）清光（第二番、第三番、〈第五番〉、第六番、〈木余〉）とするものや、親をその逆（第一番、第四番）とするものなどがある。寺々の所在地（足立郡、豊島郡）による改変かと考えられよう。これらの異伝を詳細に調査、比較して一覽し、その他の関連寺院についても調査した労作に、庄司千賀氏の論考がある。また、根本誠二氏は行基の造仏伝承、熊野権現信仰と六阿弥陀詣との関連について触れている。なお、最後に、文芸作品として、十返舎一九の滑稽本

『六あみだ詣』全三編五冊があることを記し添えておく。

(注)

(1) 都立中央図書館蜂屋文庫所蔵、縁起叢書第六冊所収。中野猛編『略縁起集成』第一卷(勉誠社、一九九五年)に翻刻がある。

(2) 庄司千賀「六阿弥陀詣と熊野信仰」(「熊野誌」第三十四号、昭和六十三年十二月)。

(3) 根本誠二「語り伝えられる行基」(速水侑編『民衆の指導者 行基』へ日本の名僧②。吉川弘文館、二〇〇四年)所収)。

(4) 中山尚夫編「十返舎一九集1」(古典文庫四二三、昭和五十六年)。同書には「六阿弥陀詣人之図」を多く掲載する。また、全行程を「惣道のり合て六里廿三丁」と記す。

〔付記〕

稿者は本書のほか、六阿弥陀詣関連の寺々の略縁起の冊子本を架蔵する。それらを収集したのは、稿者が長年居住した実家が北区志茂四丁目(旧豊島郡下村)で、近くには熊野神社があり、我が家はその氏子であったからである。つまり、郷土史

調査上の興味から集めていたのである。なお、本書以外の略縁起は、注(1)の中野猛編『略縁起集成』第一巻に翻刻されている。

〔翻刻〕

凡 例

一、本文及びルビはすべて原本通りとした。字体は通行字体を用いた。ただし、旧字体と新字体は区別して用いた。

一、原本に施された句点(。)はそのまま付した。

一、会話部分、夢告部分には「」を入れた。

一、丁替わり、表・裏は、丁数、オ・ウの順で、每半丁末尾に、「(二オ)の如く示した。

一、「ニ」「ハ」「ミ」は片仮名として表記した。

六阿彌陀縁起

(中央) (四周単辺枠囲い)

「(表紙オ)」

武蔵國六阿彌陀靈場

一番元木	豊島	西福寺
二番	沼田	延命寺
三番	西ヶ原	無量寺
四番	田端	興樂寺
五番	下谷	常樂院
六番	亀戸	常光寺

「(表紙ウ)」

武蔵國六阿彌陀縁起

抑武蔵國。六阿彌陀の縁起を原ぬるに。往昔、聖武天皇の頃かとよ。此國足立郡に。足立の長者と云し豪族あり。家産豐饒にして。何不足なき身なりしが。宿因のなす所にや。老年に及ぶまで。いまだ一子を得ざりければ。常に之を憂ひて。遙に紀伊國の熊野大神に祈請し。何とぞ一子を得せしめ給へと。丹誠怠ること無かりければ。其感應空「(二オ)」しからずして。遂に玉の如き。女子一

人を得たり。長者の喜いはんかたなく。之を足立姫と名づけて。掌中の花の如く。愛育したりしが。成長の後ハ。世に雙なき美人となり。糸竹の道文よむわざまで。何秀ずといふことなかりければ。遠近之を聞て。誰愛敬せぬ者なく妻にせん嫁にせんと。懇望する者。引もきらさりけるといふ。其比隣郡に。豊島の長者とて。此も世に名だる。富豪の「(二ウ)」名族あり。彼の足立姫の美艷にして。且才女なる由を聞て。切に懇望せしが。同じ豪族の事なれハ。好き配偶なりとて。速に嫁せしめ。たり然るに如何なる宿世の因縁にや。足立姫いたく姑の惡ミを受て。世にも有られまじく。歎き悲しミ居たりしが。或日親里へ歸らんと。豊島の家を立出て。帰途に趣きけるが。彼の姑の惡ミにや迫りけむ。其道の沼田川と云に。身を投て没したり。之を見「(二オ)」て。姫に仕へ居たりし従婢とも。いと悲しき事に思ひ。姫に追付まゐらせんと。我もくと入水し。遂に五人迄に及びたり。足立長者天にも地にもあられず。悲歎の涙に咽び。泣々その吊など為をへたれと。やるかたなさの餘り。せめてハ六女の菩提の爲にとて。遂にミづから發心し。家ハ親族の者に托しおきて。諸國の靈場を參拜にと。出行たり。さてめぐりく。紀伊國に至りければ。彼の姫を祈請し奉りし。「(二ウ)」熊野神のことを思出し。先づ熊野神に參籠

し。讀經など懇に奉りて。夜更るまで拜し居りしがまどろむともなく眠りたる夢中に。神殿の中より。御聲高らかに。「我汝が誠祈に依て。一子を受けたりしハ是汝をして。菩提の道に入らしめんが爲の。善方便なり。今汝世間の愛縛を出て。佛の道に志したれば。汝が出離ハ此上なし。今よりハ其因縁を以て。新に佛像を造り。廣く衆生を濟度せよ。我其良材」(三才)を得せしめん」と。神敕ありと見て。夢さめたり。長者感涙肝に銘じ。急ぎ下山しけるが。其道にて。遙に光明赫々たる。靈木あるを見る。長者大によるこび。是こそ神の賜ふ所の靈木ならめと。山人に乞て之を斫り。熊野浦へ曳出し。さて祈りて申けるハ。「神靈空しからずバ。今此靈木。我故郷の沼田浦に。漂著せしめ給へ」と。言終りて推流しけるが。其後諸州の佛閣を拜し畢りて。故郷へ(三才)還りたるに。是よりさき彼の靈木。沼田浦に漂著し。夜なく光を放ちければ。土人等怪し居りしを。長者かへりて。事の由を物語り。神靈の掲焉なるを仰ぎ居たり。今其處を。熊野木と云ふ。其折から行基菩薩。此國に巡化し來り給ひければ。長者急ぎ逢奉りて。娘のこと靈木のこと。具に物語りし。「何とぞ佛像を彫刻し給へ」と。乞申ければ。菩薩聞給ひ。「我にも不思議の神告。思ひ合すことあり」とて。(四才)彼の六女の菩提の爲。六字の名號に

配し。速に六體の阿彌陀佛を彫刻し玉ふ。今其處を名づけて。元木といふ。其後其尊像を。長者が家の程近き處々に。佛堂を建て之を供養し奉る。是れ今の六阿彌陀。六箇寺是なり。此等の因縁あるに依て。彼の六箇寺の名を。彌陀の誓願に取りて。先第一にハ。彌陀の悲願によりて。後生ハ西方淨土に生れて。福樂無邊の利益を得せしめ給ふに取り。(四才)西福寺と名づけ。第二にハ。現世にハ息災延命。家門繁榮の利益を得せしめ給ふに取りて。延命寺と名づけ。第三に。ハ其上福壽無量にて。諸願成就せしめ給ふに取りて。無量寺と名づけ。第四にハ。我等一切衆生に。拔苦與樂の大悲を垂給ふに取りて。與樂寺と名づけ。第五にハ。常に一家親族迄も。安樂ならしめ給ふに取りて。常樂院と名づけ。第六にハ。未來ハ極樂に生れて。常に光明を(五才)放つの身を。得せしめ給うに取て常光寺と名づけたりとなん。抑阿彌陀佛ハ。五劫に思惟して。四十八の悲願をたて給ひ。濁惡の衆生をして。悉く極樂淨土へ。往生せしめ給ふの。大誓願ましまし。右寺號の如きの。利益を受け給ふなれば。古より春秋二季の時正の。彼岸の節にハ。殊に歩を運びて諸人參詣すること。今に至るまで衰ふることなし。是故に信心の男女ハ。深く誓願(五才)を仰奉りて。二季の彼岸ハ申迄もなく。常にも參詣して。其利益に預り給ふ

べし

明治十三年

九月廿日翻刻

「(裏表紙オ)

(白)

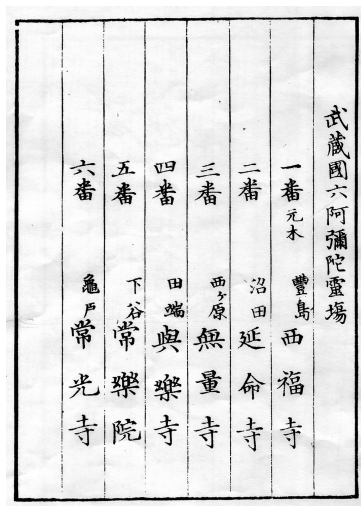
「(裏表紙ウ)

(筑波大学名誉教授・元文教大学教授)

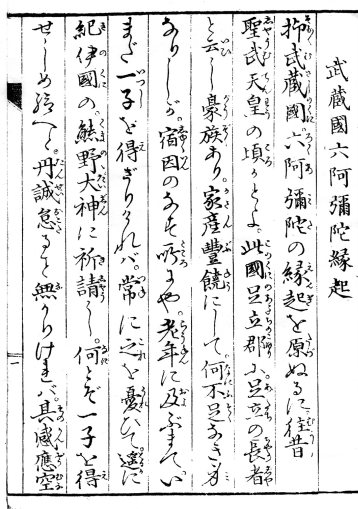
(表紙才)



(表紙ウ)



(一才)



(裏表紙才)

